広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」第４号　2023　228－236

『少年の日の思い出』の謎を解く

― 矛盾する言葉を手掛かりに ―

柳　澤　浩　哉
（2023年10月６日受理）

A Rhetorical Analysis of “Shounen-no-hino-omoide”

Hiroya Yanagisawa

Abstract: The article “Memories of Youth” may appear to be a straightforward novel, but upon careful reading, several words can be found that contradict the protagonist’s thoughts and actions. The aim of this paper is to provide a new interpretation that can rationally explain the presence of such words.

This work takes the form of a character recalling past events. Therefore, in this paper, we have formulated the following two hypotheses to construct an explanation for the contradictory words in the protagonist’s psychology and behavior:

1. Novels in a reminiscence format are narrated through a filter that justifies oneself.
2. Even with such a filter, the narrator cannot completely conceal what they want to hide.

By establishing these two hypotheses and examining them, we can explain all the words that seem to contradict the context. Words that appear contradictory are those that have passed through the self-justification filter, in other words, words that the narrator failed to hide. These words contain the true feelings that the narrator tried to conceal. By focusing on this aspect, this paper was able to propose a new interpretation that can resolve the contradictions.

Key words: rhetorical analysis
キーワード：少年の日の思い出，修辞学的分析

1　はじめに

『少年の日の思い出』を注意深く読むと，説明困難な謎めいた表現に出くわす。定番教材として高い評価を得ている作品だけに，この作品には多くの先行研究があるが，筆者が調べた範囲では（言葉の意味を確認しながら進めるような研究を含めて），謎めいた表現の存在を指摘している研究に出会うことはできなかった。謎めいた表現とは，例えば次の引用の下線部である。引用は少年がエーミールの部屋に忍び込む場面である。（引用本文に付した下線は筆者による。以降の引用も同様。）

上にたどり着いて，部屋の戸をノックしたが，返事はなかった。エーミールはいなかったのだ。ドアのハンドルを回してみると，入り口は開いていることが分かった。

<u>せめて</u>例のチョウを見たいと，僕は中に入った。

『明鏡国語辞典』では「せめて」を次のように説明している。「満足ではないが，最低限それだけは実現させたい，そうあってほしいという気持ちを表す。不満足ながら，少なくとも。」つまり，エーミールの部屋に忍び込んだ時，「例のチョウを見たい」という欲求は，「最低限それだけは実現させたい」というささやかな願望だったことになる。では，エーミールの部屋に入った本当の欲求・目的とは何だったのか。本当の欲求は「チョウを見」ることよりも，ずっと大胆で大

きな欲求でなくてはなるまい。だが,〈できるならチョウを盗みたい，少なくともチョウを見たい〉と思いながら部屋に忍び込んだと考えるのは，あまりに強引である(盗みの動機については後程検討する)。エーミールの部屋に忍び込んだ本当の欲求・目的は，何だったのだろう。

あるいは，チョウを盗んだ直後に出てくる次の表現も謎めいている。

> すると，四つの大きな不思議な斑点が，挿絵のよりはずっと美しく，ずっとすばらしく，僕を見つめた。それを見ると，この宝を手に入れたいという逆らいがたい欲望を感じて，僕は生まれて初めて盗みを犯した。僕はピンをそっと引っぱった。チョウはもう乾いていたので，形は崩れなかった。僕はそれをてのひらに載せて,エーミールの部屋から持ち出した。その時，さしずめ僕は，大きな満足感のほか何も感じていなかった。

ヤママユガの「不思議な斑点」に魅入られ，その魅力によって盗みを働いてしまったのだから罪悪感がなかったことは分かるが，この場面で満足感を感じた事には違和感がある。多少とも余裕がなければ「満足感」を感じることはできないからである。次の状況を考えて欲しい。〈徒競走で二位以下に差をつけてゴールすることができた。〉彼が満足感を感じるのは，次のどのタイミングだろうか。

(a) ゴール手間で振り向き，二位以下との差を確認した時。
(b) 一着でゴールした瞬間。
(c) ゴールしてしばらく経った時。

(a) のタイミングを選ぶ人は，まずいないだろう。もしもゴール手前で満足感を感じてしまったら，彼の速力は間違いなく落ちる。多くの人が指示するのは一番余裕のある (c) のタイミングだと思う。これは盗みにおいても同様で，盗みを実行している途中で満足感は感じないだろう。だが，引用部の主人公は，上の (a) のタイミングで「大きな満足感」を感じていることになる。あまりに不自然である。

さらに時間的な面においても，この場面での「満足感」には違和感がある。『日本国語大辞典』は「満足」について「希望が満ち足りて不平がなくなること。また，そのさま。」(下線筆者) と説明している。本文に語られている状況と「満足」という言葉の間に不整合のあることが分かるだろうか。「希望が満たされる」という時，その「希望」はある程度持続していなくてはならないからである。突発的な欲望が起こって，それが瞬時に満たされた時，その状態を「希望がかなった」とは言わない。「希望」は願望がある程度長期にわたって保持されていることが条件である。『日本国語大辞典』は「希望」について「こいねがうこと。あることが実現することを待ち望むこと。」と説明している（下線筆者)。つまり，この場面で「満足感」を感じるためには〈どんな手を使ってもヤママユガを手に入れたい〉と待ち望んでいたことが条件になり,「不思議な斑点」による突発的欲望で盗みを犯したという説明と矛盾するのである。場面の状況と「満足感」とは，心理的にも時間的にも相容れない。これも説明困難な謎めいた表現である。

『少年の日の思い出』は一見平易な小説のように見える。中学一年の教科書に収録されているのは，そう理解されてきた結果であるが，作品のクライマックスである盗みの場面にこれだけ説明困難な表現が存在しているのだから，決して平易な作品ではない。

ここにあげた二つの表現を〈作者のミス〉として黙殺する立場があるかもしれないが，説明できない都合の悪い表現を〈作者のミス〉と決めつけるのは，文学作品を読む姿勢としてアンフェアである。例えば石原千秋氏が，このような姿勢を戒めていることは良く知られている[1)]。ここにあげた二つの表現を合理的に説明できないままで,『少年の日の思い出』を理解できたと言えるだろうか。

『少年の日の思い出』には，この他にも説明困難な表現が見いだせる。作品内の説明困難な表現を合理的に説明できる新しい読みを提示することが本稿の課題である。なお，この目的を実行するにあたって本稿はテキスト外の情報を使用しない。テキストに残された情報だけで本稿の目的は達成できる。

2　語りの二重性への疑問

『少年の日の思い出』には二つの時間があり，現在の「私」の語る〈冒頭部〉と，「僕」が自分の体験を語る〈回想部〉に分かれている。なお,「僕」は〈冒頭部〉で「客」,「友人」と呼ばれている登場人物である。〈冒頭部〉と〈回想部〉に分かれる小説は枠小説と呼ばれるが，この作品は枠小説のお約束を守らず,〈冒頭部〉に戻ることなく回想のまま終わっている。最近の先行研究では〈回想部〉における語りの二重性に関する議論が盛んで，それに触発される形で作品の構造が注目されているが，本稿はこの作品には語りの二重性が存在しないと考える。本論に入る前に,『少

年の日の思い出』における語りの二重性について検討しておきたい。

この作品の〈回想部〉とは，「僕」が「私」に語った物語である。つまり，〈回想部〉に掲載されているのは「私」が聞いた話であり，「僕」の語りを「私」が語り直していると考えることができる。これが語りの二重性である。語りの二重性という指摘は一見鋭く思えるが，本稿はこの解釈には賛同しない。この問題を提起した竹内氏は次のように書いている[2)]。

> それでもその語りはつっかえ，よどみ，つまるものであったのではないか。そればかりか，自分を責めすぎるという偏りがあったのではないか。
>
> ところが，小説はかれの話を筋の通ったものとして提示している。それはわたしがかれの話を聞き取り，ひとつの物語を書いているからである。その際，私はそれを筋の通ったものにしその陰影をきわだたせ，その主題を明確にしようとしたにちがいない。

この主張には二つの点で反論できる。まず，回想形式の小説では語り手に，超人的な記憶力，極めて高い言語能力，優れた構成力を付与する暗黙のルールが存在するからである。これらを認めなければ回想形式の小説は成立不可能になる。したがって，「語りはつっかえ，よどみ，つまるものであったのではないか。」という意見は，小説の基本ルールを無視した意見と言える。さらに，登場人物が自分の体験を語る回想形式の小説では，語りが改変されずに掲載されたと考えることがデフォルトである。もちろん，それがデフォルトであっても，その変更は簡単である。たとえば，「客はこんな話を始めた。」といった言葉を加えるだけで改変の可能性を暗示できるからである。だが，この作品のどこを探しても改変を暗示する材料を見つけることはできない。ヘッセが改変の暗示を行っていない事実を軽視してはなるまい。

さらに，〈冒頭部〉の「客」は次のように言って回想を始める。「実際話すのも恥ずかしいことだが，ひとつ聞いてもらおう。」この前置きには，これから語る回想がまとまっているという自信が感じられる（「ひとつ」という語のニュアンスに注意して欲しい）。そして，この前置きの後には次の叙述が置かれている。

> すると，私たちの顔は，快い薄暗がりの中に沈んだ。彼が開いた窓の縁に腰かけると，彼の姿は，外の闇からほとんど見分けがつかなかった。私は葉巻を吸った。外では，カエルが遠くから甲高く，闇一面に鳴いていた。友人はその間に次のように語った。

大げさと思えるほどに非日常的・幻想的な空間が準備されて，これから語られる回想が特別なものであることを期待させる。つまり，〈回想部〉は「客」が自信を持って語る特別な物語として始まるのである。回想小説のデフォルトに加えてこれだけの材料があれば，「私」による改変，すなわち語りの二重性という想定は排除されるべきだろう。

3　本稿の前提と「僕」の特異性

回想形式が『少年の日の思い出』を読み解く鍵になるという指摘には本稿も賛同である。回想形式の小説には共通のバイアスが想定され，これが〈回想部〉に散見する謎めいた表現を解く鍵になると考えるからである。回想形式の小説は（どこまで意識していたかは別にして），自己の正当化や美化が行われていると考えられる。これを自己正当化フィルターと呼ぶことにしよう。その一方で，隠そうと思いながらも，自己正当化フィルターを通り抜けてしまう言葉や表現が存在するはずである。本稿ではこの二つを前提として，〈回想部〉を読み解いていきたい。

> 語りには自己正当化フィルターがかかっている。
>
> 自己正当化フィルターは隠したいことを100％隠すことはできない。

どちらも人間の自然な傾向だから，前提というには当たり前すぎるかもしれない。ここで重要なことは，自己正当化フィルターを通り抜けた言葉や表現は，その前後と何らかの摩擦を起こす可能性が高いこと，そして，通り抜けた言葉や表現には隠したかった本心が現れていることである。本稿の最初に示した二つの謎めいた表現は，自己正当化フィルターと本音の対立として説明できると考えている。

以上は語りについて一般的に言えることである。では，『少年の日の思い出』を理解する上でのポイント，すなわち〈回想部〉の個性と言えるものは何だろうか。それは，語り手である「僕」が強い個性を持っていることである。それは個性というより「僕」の問題点と言うべきかもしれない。〈回想部〉を理解するために，「僕」の強い個性，具体的にはエーミールに対する攻撃的で激しい気持ちを隠していた事実から確認してみたい。「僕」の思考や行動を考える時に，これが前提となっていくだろう。次に引用するのは，エーミールにヤママユガの破壊を謝罪している場面である。

すると，エーミールは激したり，僕をどなりつけたりなどしないで，低く，ちえっと舌を鳴らし，しばらくじっと僕を見つめていたが，それから「そうか，そうか，つまり君はそんなやつなんだな。」と言った。

僕は彼に，僕のおもちゃをみんなやると言った。それでも彼は冷淡にかまえ，依然僕をただ軽蔑的に見つめていたので，僕は自分のチョウの収集を全部やると言った。しかし彼は，「けっこうだよ。僕は君の集めたやつはもう知っている。そのうえ，今日また，君がチョウをどんなに取り扱っているか，ということを見ることができたさ。」

その瞬間，僕はすんでのところであいつの喉笛に飛びかかるところだった。もうどうしようがなかった。僕は悪漢だということに決まってしまい，エーミールはまるで世界のおきてを代表でもするかのように，冷然と，正義をたてに，侮るように，僕の前にたっていた。彼は罵りさえしなかった。ただ僕を眺めて，軽蔑していた。

まず，ここでのエーミールの「作戦」から確認してみたい。この場面でエーミールは，「僕」を徹底して軽蔑し見下すことで復讐しようとしている。そのためには自分が「僕」より圧倒的に上にいなくてはならない。エーミールが冷静にふるまったのは，〈お前には自分を傷つけることも動揺させることもできない〉という格の違いを見せつけるためだろう。エーミールは二回発言しているが，二つの発言の趣旨はほぼ同じで〈この事件によって君がどういう人間であるか分かった〉というものである。最初の発言で「僕」の人間性全体を否定し，二回目の発言では「僕」のチョウのコレクションを否定している。そして「僕」は，自分の全てをかけて作り上げてきたコレクションを否定された時に切れそうになる（「僕」が最初の言葉に反応しなかったのは，この言葉の重みを感じるにはまだ幼かったからだろう）。エーミールが周到なのは，「君の集めたやつはもう知っている」でコレクションの数や種類すなわち量的な面を否定し，「チョウをどんなに取り扱っているか」で技術やチョウに対する気持ちといった質的な面を否定していることである。この場面においてエーミールは，どうやったら「僕」を最大限傷つけられるかを考えていたに違いない。そして思惑どおり，生涯消えない傷を残すことに成功している。

エーミールの狡猾さと「僕」の絶望が印象に残る場面であるが，この場面では「僕」の特異性を見出すことができる。下線を引いた箇所がそれである。この場所に注目した先行研究に出会ったことはないが，ここではエーミールに対する「僕」の危険な攻撃性があらわになっている。次の二つを比較して欲しい。

僕はすんでのところであいつに飛びかかるところだった。

僕はすんでのところであいつの喉笛に飛びかかるところだった。

二つの文の違いは「喉笛に」があるか否かだけだが，二つの文は危険性において大きな違いがある。「飛びかかる」は単純な暴力だが，急所である「喉笛」を狙って「飛びかか」れば命にかかわる大きなダメージを与えるだろう。この瞬間「僕」はエーミールに殺意を抱いたことが分かる。切れやすい少年が感情を爆発させて暴力をふるってしまう時，その少年は何も考えていないから，あえて急所を狙ったりはしない。感情の爆発が殺意を引き出すとすれば，その原因として考えられることは一つしかない。日頃から相手を〈殺してやりたい〉と思っていた場合である。とはいえ，これは本当に殺したいという気持ちである必要はない。〈殺したいほど憎い〉，〈殺したいほど嫌だ〉，そんな気持ちで十分だろう。「喉笛に」という言葉が自己正当化フィルターを通り抜けたことで，「僕」が隠そうとしてたエーミールに対する本音が漏れてしまったのである。

失うものが少ない12歳という年齢で，誰かを〈殺したいほど憎い〉と思う少年は決して多くはあるまい。彼のこの激しい気持ちには驚かされる。「僕」がエーミールを憎み嫌っていたことは〈回想部〉で何度か言及されているが，〈殺したいほど憎んでいた〉ことは一切語られていない。これを隠そうとしたのは，この気持ちが異常であるという自覚が「僕」にあったからだろう。

4　「僕」とエーミールの関係

エーミールに対する激しい気持ちを確認できると，〈回想部〉に散見する分かり難い表現・説明の意味が明らかになってくる。まず，エーミールに対する「僕」の気持ちを一番はっきり書いている箇所について考えてみよう。

この少年は，非の打ちどころがないという悪徳を持っていた。それは子供としては二倍も気味悪い性質だった。（中略）とにかく，あらゆる点で，模範少年だった。そのため，僕は妬み，嘆賞しながら彼

を憎んでいた。

ここに書かれている気持ちが今一つ分かり難い。「非の打ちどころがない」ことが周囲の子供にコンプレックスを与えたり，嫌味に映ったりすることは分かる。だが，それだけで「悪徳」や「二倍も気味悪い性質」となるだろうか。両者の間には明らかに飛躍がある。同様に，「あらゆる点で，模範少年だった」ことと「憎んでいた」の結びつきも分かりにくい。完璧な模範少年ならば「僕」から憎まれるはずがないので，「僕」の言う「あらゆる点で，模範少年だった」という言葉の意味には注意が必要である。

この問題を解決するために，「僕」とエーミールとの関係を可能な限り具体的に考えてみよう。「僕」とエーミールとの関係を伝える具体例が〈回想部〉には二つ収められている。一つは先ほど引用した謝罪の場面であり，もう一つはエーミールにコムラサキを見せた場面である。コムラサキの場面を引用してみる。

> 彼は専門家らしくそれを鑑定し，その珍しいことを認め，二十ペニヒぐらいの現金の値うちはある，と値踏みした。しかしそれから，彼は難癖をつけ始め，展翅の仕方が悪いとか，右の触覚が曲がっているとか，左の触覚が伸びているとか言い，そのうえ，足が二本欠けているという，もっともな欠陥を発見した。

この場面でのエーミールの発言が，先ほどの謝罪場面と似ていることに気づいただろうか。最大の共通点は「僕」を大きく傷つけている点である。こちらは復讐する場面ではないが，ここでもエーミールは効果的に「僕」をおとしめ傷つけている。さらに，自分はお前よりも圧倒的に上だという態度も共通している。その上で，触角や足への「難癖」は客観的で反論できない。

なお，最初に「二十ペニヒ」という金額を提示していることから，エーミールは金銭に敏感なタイプ，あるいは金銭的に考えるタイプと断定するのは短絡的な気がする。エーミールは他人を褒めることができない。コムラサキの珍しさを金額で表現すれば，（それが巨額でない限り）珍しさは相対化されて価値が小さく感じられる。つまり，価値を認めつつもその価値を小さく見せるために金額を示したと考えるべきではないか。さらに，金額を具体的に提示すれば自分の鑑定眼を印象付けられる。エーミールの性格を考えると，金銭に敏感だから金額を提示したのではなく，チョウの価値を小さく見せ，自分の鑑定眼を印象づけるために金額を示したと考えるべきだろう。

二つのエピソードから，エーミールの態度や言動がどのようなもので，それが子供たちにどう見えていたかが，ある程度推測できる。まず，自分は完璧だという自信に満ちあふれており，周囲の子供たちを見下している。自分より上の子供はいないと思っているから，少しでも自慢しようものなら大変な〈仕返し〉を受けてしまう。さらに，エーミールは知識や言語能力が圧倒的に高く，子供たちは何を言われても言い返せない。ただし，そんなエーミールを大人の目で冷静に見れば，器の小さい人間であること，さらに自分の能力をひけらかす背景には何らかのコンプレックスがあると推測できるが，当時の「僕」にエーミールの弱点を見つけることは不可能だった。弱点が掴めないまま彼の嫌なところを言ったために「非の打ちどころがないという悪徳」という分かりにくい表現になったのだろう。

その上で，エーミールの被害を一番受けていた子供が「僕」だったと考えられる。「僕」とエーミールは隣どうしであり，さらに彼らは頻繁に行き来していた。エーミールの家に忍び込んでも女中に怪しまれなかったことから，頻繁な行き来のあったことは明らかである。「僕」はチョウに限らず，何かにつけてエーミールに見下されていたのだろう。また，エーミールに，恵まれた環境や持ちものを自慢されることもあったと思われる。エーミールの部屋に忍び込む時，次の説明が唐突に出てくる。「そこに例の先生の息子は，小さいながら自分だけの部屋を持っていた。それが僕にはどれくらい羨ましかったかわからない。」これほど強い言い方をするのは，自分の部屋を持たない「僕」の心を逆なでするような言動を，エーミールが敢えてしていたからだと想像される。これらに加えて，「僕」はプライドが高い。エーミールに対する悔しい思いの積み重ねから〈殺したいほど憎い〉という気持ちを募らせていったことは想像に難くない。ただし，どんなに悔しい気持ちが重なったとしても，誰もが〈殺したいほど憎い〉と思うわけではない。「僕」には過激なところ，極端な傾向がある。これについては，母親がアドバイスに込めた意図と合わせて後程考えてみたい。

5　謎めいた表現の意味

本稿の冒頭にあげた謎めいた表現の意味を考えてみよう。エーミールの部屋からヤママユガを盗み出す場面である。

> すると，四つの大きな不思議な斑点が，挿絵のよりはずっと美しく，ずっとすばらしく，僕を見つめた。

それを見ると，この宝を手に入れたいという逆らいがたい欲望を感じて，僕は生まれて初めて盗みを犯した。僕はピンをそっと引っぱった。チョウはもう乾いていたので，形は崩れなかった。僕はそれをてのひらに載せて，エーミールの部屋から持ち出した。その時，さしずめ僕は，大きな満足感のほか何も感じていなかった。

下線部について考える前に，波線を引いた「僕を見つめた」という表現に注目してみたい。これが擬人法であることは言うまでもないが，自分の意思ではなく「不思議な斑点」にあやつられて盗んでしまったと主張する上で，「不思議な斑点」を人間化するこの擬人法は非常に効果的である。擬人法は単に表現を印象的にするだけの技法ではない[3)]。

さて，冒頭では次の問題を提起した。僕は盗みの動機を〈「不思議な斑点」に魅入られて生まれた突発的欲望〉だったと説明しているが，この時に彼が感じた「満足感」は〈待ち望んでいたことの実現〉に対して使う言葉であり，「満足感」と彼の説明が相容れないという問題である。

この矛盾も，自己正当化フィルターを本音が通り抜けてしまったことで，生まれたものと考えられる。自己正当化フィルターを通り抜けたのは「満足感」であり，ここに隠したかった本音が出ていると考えられる。「不思議な斑点」の魅力によって盗み出したという動機はもちろん嘘ではあるまい。だが，盗みの動機はそれだけではなかった。ただし，以前からヤママユガを盗みたいと考えていた，と考えるのはさすがに無理がある。では「僕」が密かに〈待ち望んでいた〉願望とは何か。この時に手掛かりとなるのが，〈殺したいほど憎い〉という気持ちである。この気持ちが長期的であることは間違いない。そして，〈殺したいほど憎い〉という気持ちは，エーミールを傷つけたい・復讐したいという抑えがたい欲求を生むはずである。つまり，彼の宝物を盗んだことには，エーミールに対する復讐という意味があり，それによって「満足感」を得たと説明できる。そして，「さしずめ僕は，大きな満足感のほか何も感じていなかった」という言葉からは，エーミールに対する復讐心の強さが感じられる。

以上の説明は，「満足感」の時間的矛盾の説明だが，本稿の冒頭で，この「満足感」には精神的な面からも違和感のあることを指摘した。すなわち，緊張しているはずの盗みの途中では満足感を感じられないはず，という違和感である。こちらについては後程考えてみたい。

エーミールに対する復讐の願望は，別の箇所にも垣間見える。それが見られるのは階段で女中とすれ違う場面である。

その瞬間に僕の良心は目覚めた。僕は突然，自分は盗みをした，下劣な奴だということを悟った。同時に，見つかりはしないかという恐ろしい不安に襲われて，僕は本能的に，獲物を隠していた手を，上着のポケットに突っ込んだ。

下線部の「獲物」という言葉に注意したい。『明鏡国語辞典』では「獲物」の２つ目の意味として「戦いなどでうばいとった物。」という説明をあげている。下線部は「獲物を隠していた手」ではなく，「宝物を隠していた手」や「チョウを隠していた手」と言う方が自然であるが，エーミールから「うばいとった」という意識があるために「獲物」という言葉が出てきたのだろう。

ヤママユガの盗みには二つの動機があった。一つは「僕」の語っている動機，すなわち「不思議な斑点」を見たことで生じた「逆らいがたい欲望」，もう一つは〈エーミールに復讐したい〉という「僕」がひた隠す動機である。

彼がエーミールの部屋に入ってからの大胆すぎる行動に，筆者はずっと違和感を抱いてきた。ヤママユガを見つけ出し，その斑点を見るまでの行動はあまりに大胆で迷いがなく，それは遠慮や躊躇がないというレベルを越えており，あたかも，犯人のアジトに踏みこんで証拠品を探す刑事のようである。「僕」のこの大胆すぎる行動も，彼がひた隠す動機から生まれているのではないか。冒頭に指摘したもう一つの謎めいた言葉に，その理由を解く鍵があると思う。エーミールの部屋に入る場面を引用してみよう。

上にたどり着いて，部屋の戸をノックしたが，返事がなかった。エーミールはいなかったのだ。ドアのハンドルを回してみると，入り口は開いていることが分かった。

せめて例のチョウを見たいと，僕は中に入った。

まず，「せめて」にどんな意味があるのか再確認してみよう。『明鏡国語辞典』は「せめて」を次のように説明している。「満足ではないが，最低限それだけは実現させたい，そうあってほしいという気持ちを表す。不満足ながら，少なくとも。」これが説明の全てなので，「せめて」にこれ以外の意味はないと考えていい。つまり，エーミールの部屋に入り込んだ時，彼は「チョウを見たい」とは異なる欲望を持っており，それはチョ

ウを見ることよりも，はるかに大胆で重要な欲望だったことになる。だが，最初からチョウを盗むつもりでエーミールの部屋に入ったとは考えにくい。この時の「僕」の本当の願望とは何だろう。本文を確認すると，上の引用の直前には自分の部屋を持つエーミールに対する激しい羨望が語られている。

> そこに例の先生の息子は，小さいながら自分だけの部屋を持っていた。それが僕にはどれくらい羨ましかったかわからない。

自分の部屋がないというだけで，ここまで強い羨望は生まれないだろう。部屋を持たない「僕」の気持ちを逆なでするような言動をエーミールが繰り返したために，ここまで激しい羨望が生まれたと考えるべきである。「せめて例のチョウを見たい」という謎めいた言葉は，そんなエーミールに対する復讐と結びつけることで解決できる。エーミールの聖域である彼の部屋に入り彼の聖域を汚すことは，自分の部屋を自慢するエーミールに対する復讐の意味を持つからである。エーミールの秘密の品々に手を触れ，それを開き，隠してあるものを暴いていくこと，あるいはヤママユガを手に取って至近距離から眺めること，そういった全てのことがエーミールの聖域を汚す意味を持つだろう。ヤママユガを見たいという表向きの欲望は，それに比べればはるかに小さい最低限の欲望だったのである。部屋に入ってからの「僕」の行動があまりに大胆なのは，大胆に振舞うこと自体が欲望の実現だったからだと考えられる。エーミールの部屋でヤママユガを探す「僕」は，エーミールの聖域を汚すことに興奮を覚えながら，その行為に熱中していたに違いない。この場面のハイライトと言える，展翅板のピンを抜く場面を引用してみよう。

> 胸をどきどきさせながら，僕は紙きれを取りのけたいという誘惑に負けて，ピンを抜いた。

この一文は意味深長である。展翅されたヤママユガをピンを抜いて取り出すことは，エーミールの聖域の頂点を汚す行為に外ならない。ピンを抜く瞬間に「胸をどきどきさせ」たのは，ヤママユガの斑点を見るという純粋な興味以上に，それがエーミールの聖域の頂点を汚す意味を持っていたからである。つまり，二重の意味でこの瞬間彼の興奮は最高潮に達したと考えられる。その後，彼の興奮は徐々に収まっていったはずで，部屋を出る時には「大きな満足感のほか何も感じていなかった」と思えるまでにリラックスできたと考えられる。

6　母のアドバイスの意図

最後に母親について検討してみたい。彼女は毅然とした態度でエーミールへの直接謝罪を命じる立派な母親であるとともに，物語を展開させる重要な役割を担う人物でもある。ここで考えたいのは母親がどのような動機から，エーミールへの謝罪を命令したかである。母親が「僕」にアドバイスする場面を，その少し前から引用してみる。

> ついに一切を母にうち明ける勇気を起こした。母は驚き悲しんだが，すでにこの告白が，どんな罰を忍ぶことより，僕にとってつらいことだったということを感じたらしかった。「おまえは，エーミールのところに行かねばなりません。」と母はきっぱりと言った。「そして，自分でそう言わなくてはなりません。それよりほかに，どうしようもありません。お前の持っている物のうちから，どれかを埋め合わせにより抜いてもらうように，申し出るのです。そして許してもらうように頼まねばなりません。」
>
> あの模範少年でなくて，他の友達だったら，すぐにそうする気になれただろう。彼が僕の言うことをわかってくれないし，おそらく全然信じようともしないだろうということを，僕は前もって，はっきり感じていた。かれこれ夜になってしまったが，僕は出かける気になれなかった。

まず，母親の命令が直接話法によって正確に引用されていることに注意したい。〈母はきっぱりとした口調で，エーミールのところに行って謝るしかありませんと言った〉のように要約してもよいように思えるからである。母親は毅然とした態度で的確なアドバイスを与えているように見えるが，このアドバイスは本当に的確だろうか。筆者は「僕」に対する母親の誠実さを疑っている。そう考える根拠は次の部分である。「お前の持っている物のうちから，どれかを埋め合わせにより抜いてもらうように，申し出るのです。」〈回想部〉の前半では，親が自分に立派な道具を買い与えてくれなかったことが強調されている。これは採集道具だけでなく，それ以外の玩具についても同様であり，母親にはそれがよく分かっていたはずである。その上で，「僕」が破壊したヤママユガが貴重なものであることを，「僕」は彼女に伝えていたと考えられる。だとすれば，「僕」の所有物では到底つぐないきれないことが母親には予想できたはずで，この場面で母は失敗す

ると分かっているアドバイスを伝えたことになる。もしも，息子とエーミールの和解を第一に考えていたら，彼女のアドバイスは，例えば次のようになったのではないか。

> どうしたら許してくれるか，エーミールに尋ねてみるのです。

ヤママユガの価値を考えれば，このような無制限の補償を申し出る以外に，エーミールの許しを得ることは不可能なのではないか。だが，彼女はそうしていない。おそらく彼女は，失敗すると分かった上で，アドバイスを与えていた。なぜ，そんなことをしたのだろうか。先ほどあげた無制限の補償では親の補償が含意されているが，彼女が与えたアドバイスは〈この問題を自分一人で解決しなさい〉という姿勢に貫かれている。そこには母親としての深謀遠慮があったと筆者は考えている。

「僕」に抑えの効かない激しさのあることは〈回想部〉の最初のところで強調されている。

> 僕は全くこの遊戯のとりこになり，ひどく心を打ち込んでしまい，そのため他のことはすっかりすっぽかしてしまったので，みんなは何度も，僕にそれをやめさせなければなるまい，と考えたほどだった。

「と考えたほどだった」とあるのは，やめさせようとしたが，それを試みることはなかったという事だろう。到底やめさせられないと分かっていたから諦めたに違いない。一つの物事に過度に執着してしまう「僕」の資質は，暴走する危険がある一方で，困難なことをやり遂げる成功者の資質でもある。両刃の剣と言える気質だが，彼を育ててきた母親はこの気質のマイナス面に危機感を抱いていたのではないか。〈いつか取返しのつかない事件を起こしてしまう〉という危惧である。ヤママユガ事件はそんな彼女の危惧を具現するものだが，幸い12歳という年齢がその社会的影響を最小限に抑えてくれる。「僕」の資質に危機感を抱き続けてきた彼女は，この事件を貴重な教訓として利用しようとしたのではないか。

彼女はエーミールが自分の息子を見下し，時には傷つけていることを知っていたはずで，直接謝罪をすればエーミールが「僕」に深い傷を負わせることも十分予想できていた。息子の危険な資質にブレーキをかけるには，それくらい痛い体験が必要で，息子の今後の人生のためにこの機会を利用しようと考えたのではないか。エーミールの家から戻った「僕」に対する母親の態度はあっさりしている。

> 母が根ほり葉ほりきこうとしないで，僕にキスだけして，かまわずにおいてくれたことをうれしく思った。僕は，床にお入り，と言われた。

「僕」は気づいていないが，母親はかなり心配して「僕」の帰りを待っていたと考えられる。キスだけして一人で寝かせたのは，「僕」の様子を間近に見て，一人にしておいても大丈夫だと判断したからだろう。そして，自分の暴走に向き合わせて反省させようと，一人にしておいたのではないか。だが，「僕」の傷の深さと行動の過激さは彼女の予想を超えるものだった。全てを賭けて打ち込んできたチョウのコレクションを自ら破壊することは，象徴的な自殺と言える過激な行為である。そうなる可能性を彼女が少しでも予想していたら，「僕」を抱きとめ，慰めたと思えるからである。

7　まとめ

次の二つの前提を立てることで，〈回想部〉に散見する謎めいた表現を合理的に説明し，『少年の日の思い出』に新たな読みを提示することが本稿の目的である。

> 語りには自己正当化フィルターがかかっている。
> 自己正当化フィルターは隠したいことを100％隠すことはできない。

謎めいた表現を自己正当化フィルターを通り抜けた「僕」の本心と考えることで，合理的な説明が得られたと考えている。考察の中では「僕」がひた隠すエーミールへの強い復讐心が浮かび上がり，それがどれほど強く「僕」を支配していたかが明らかになった。考察を終えて改めて思うのは，ヘッセという作家の力量である。

> 「僕」という個性の強い少年が，彼以上に個性の強い少年と隣どうしになり同じ趣味を持ったなら，彼らは何を考え，何をするのか。さらに，その体験を「僕」が大人になってから回想したらどんな語りになるか。

『少年の日の思い出』はこのような設定の下に作られたシミュレーションであり，その完璧な回答の一つであると思える。描かれる事件，物語の展開が劇的であるだけでなく，登場人物はキャラが立っており，その

上で，推理小説のような形で物語の真相を隠す。ヘッセの腕がいかんなく発揮された作品と言えるだろう。

本稿の読みが教室で活かされれば幸いである。

【注】

1）石原千秋『テキストはまちがわない　小説と読者の仕事』（筑摩書房，2004年）pp.3-4, pp.41-43

2）竹内常一「罪は許されないのか」（田中実，須貝千里編『文学の力×教材の力　中学校編1年』（教育出版、2001年）

3）『山月記』のキーワードである「臆病な自尊心と，尊大な羞恥心」の擬人法にも，これと同様の効果を見出せる。